

難波西鶴と海道の道

【26】

森田 雅也

西鶴の『好色一代女』
[貞享3(1686)]

西鶴が酒田より取材して完成した話は、『好色一代男』『日本水代蔵』だけではありませぬ。『西鶴名残の友』巻三の五「幽霊の足よは車にも、酒田の港、袖の浦の法師の話を載せています。難波西鶴と日本海山形庄内との関係は思いのほか深かったと言えるでしょう。それはすべて米相場の情報戦に起因します。

西鶴の『好色一代女』
[貞享3(1686)]

米相場の情報戦

た箇所ですが、こんなところでも米相場を話題にしながら歩いていく人々がいるのに驚きます。

『好色盛衰記』[貞享5(1688)]年刊「跡がさがつても買徳なる物、米の相場、あげまきが目つき」とありま

す。後で下がつても買得なのは、米の相場と遊女「あげまき」の目つきだというのがです。遊女「あげまき」は、『助六』の揚巻とも、西鶴当時実在した大坂新町藤屋の総角とも考えられますが、面白い米相場にからむ庶民の成句です。

西鶴作品に米相場で大もうけして成功した商人は多く描かれますが、最も有名なのが、

『西鶴雜留』巻一の「津の国のかくれ里」[貞享5(1688)]年刊「鴻池善右衛門」です。

初代鴻池善右衛門さんは、かなりの遊び人だったようで、堅実な父の商いを尻目に、伊丹から鴨原通い。今日丹から鴨原通い。今日もなじみの遊女のひざ枕。たまたま、隣部屋の「これは目出たや、金銀取りの内証、江戸の手代より申し越し。関東筋大風(かまて)は、八木(米のこと)俄(に)あがりなれば、これより大坂にくだりて、西国米大分買ひ込み、あがり請けたらば、太夫を根引にして、我等が奥様にする事ぞ」と

「このたびの仕合せを祈れ、夜が明け次第に(こゝを立つぞと)、今

すこしの別れ惜しみ、床をはなれかねける」という会話と様子を聞き込みます。

関東が台風被害で米の不作が予想される。値段の上がる九州米を買い占めてもうければ、一日で大金持ち。鴨原の太夫を全部請け出して、妻にするというのです。

善右衛門は生来の商人だったのでしょうか。早速、隣の情報を利用し、朝を待たずに、その日のうちに大坂へ移動し、米相場を動かす、ちゃっかりと天もつけしてしまします。刻々と変化する米相場の情報は、商人の生命ラインだったのでしょうね。

(関西学院大学文学部
日本文学言語学教授)

西鶴と山形庄内との深い関係